

PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

もう一人の子を

新潟司教：佐藤 敬一 人権福祉委員会委員長

避妊や中絶など、難しい問題の解決に直接関係する話ではないが、先輩司祭から聞いた勧めを紹介したい。結婚する二人に対する勧めである。

「子どもは多ければ多い

ほどよいのではない。育てるには時間もお金もかかる。だから、自分達は何人まで育てられるか、あなたがた二人で決めなさい」。ここまででは当り前の教え、これからが信仰の勧めである。「しかし、本当に幸せな家庭、祝福された家庭が欲しければ、自分進の力を超えることであっても、神様のために、神様の助けを信じて、もう一人産んで育てて見なさい。きっと神様の祝福、助けを知るだろう」。感動したわたしは今も受け売りを続けている。

もちろん、何組がこの勧めに応えてくれたか分からない。本当に祝福された家庭になつたかどうかも調べられない。しかし、わたしはこの勧めの威力を信じている。

第一にわたしは神様の愛、神様の助けを信じる。人間というものは、困らなければ祈らない。自分の無力を感じなければ、心から神にすがらない。だから子どもを育てるに当たって、自分の力の足りなさを知ることが大切である。ここにこの勧めの狙いがある。自分の無力を知れば知るほど、人は必死に祈るだろう。そして父なる神はそういう願いを無視なさるだろうか。面白い話がある。

アシジのフランシスコは、世間にあっても修道者の精神で生きたいと慕ってくる人々に(今の在世フランシスコ会員)、「武器を持つな」と規則を与えている。当時の社会を変えたいと言われる規則である。警察力の行きわたった今日の本とは違う、庶民まで刀やナイフを持ち歩く時代だった。平和の使者フランシスコがいくら「大丈夫だ」と言っても、皆がそれで安心した訳ではない。でも、武器なしで出歩く不安は、自然に人を神に向けさせた。外出の前には必ず祈つただろう。用事が済めば大急ぎで帰ってきたかもしれない。「ああ、助かった」。次もまた。「ああ、大丈夫だった。神様は守ってくださった」。こういう体験が重なり、こういう人が増えて、当時の社会は変

わつたと言つた。現代には参考にならない話だろうか。

第二に、わたしは両親の愛を信じる。父と母が妹の病気を振り返って、二人で話し合っているのを聞いたことがある。「もしあの時、あの子が死んでいたら、一人とも一生泣いて暮らしただろうな」。「本当に」。そんな簡単な会話だったが、両親の愛にじかに触れる思いだった。親にどの子もかけがえのない子どもである。育てるのに自分の力が足りなければ、必ず神様にすぎるだろう。

あるお父さんが言っていた。「四人目のこの子が出来たとき、また夜中に起こされるのかとため息が出た。でも、この子のためなら、どんな犠牲もできますよ。この子のいない家庭なんか、考えられません」と。その子が神様のために生まれてきた子であれば、両親は間違いなく神様の

祝福を感じるだろう。そしてその子は両親に決して神様を忘れさせない。これこそ本当の祝福ではないか。

イエス様のお言葉は今も生きている。「あなたがたのだけれど、パンを欲しい自分の子どもに、石を与えるだろうか。魚を欲しいのに、蛇を与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子どもには良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの父は、求める者に良い物をくださるにちがいない」(マタイ七、九、十一)。

もう子どものできない家庭も苦しんで祈って、「もう一人の子どもを育てる」ぐらいの費用を受け持てばよい。恵の威力は絶大である。この勧めは、中絶とか避妊の問題にも影響を与えるかもしれないと思っている。

それは神様からの贈り物だ

「もちろんこのかわいい赤ちゃんが私達が望む時に幸運にも生まれてこなければ、私達は赤ちゃんを私達が責任を持って育てる神様からの贈り物だとは見なしません。」

ジャーメイン・グレアは彼女の「セックスと運命」という本の中で次のように述べています。「全ての子どもは望まれた子どもであるべきだ」というのがスローガンですが、人間の長い歴史の中で現代の子どもほど望まれなかったことはありませんでした。

を産むのを控えているのではなく、子どもが好きでないから産まないのです。」かなり厳しい言葉ですが、その言葉は一時は急進的な女性開放論者であった人によって書かれたものなのです。

時に中絶や不妊手術も強制されています。利点(子どものできる心配の無いセックス)が危険(脳血栓や癌を含む少なくとも30以上の健康問題)より勝ると考えられています。しかし、大多数の医者が自分の妻にピルを使用させようとせず、他の女性に処方するのはちょっと変だとは思えませんか。

いないことを意味していません。マギー・ギャラガーが、彼女の「エロスの敵」という本のなかで「セックスをすれば赤ちゃんができるのです。」

イエスは、カルバリ(キリスト、はりつけの地)への途中で涙を流して泣いているエルサレムの女性に話しかけ、「私のために泣くことはない。むしろあなたたちと、あなたたちの子らのために泣け。『うまずめ、子を生まなかつた胎、飲ませなかつた乳房は幸いだ』と言つ日が来る。」(ルカの福音書第23章28-29節)と言いました。その時、イエスは今世紀の後半のことを正確に予言して

そして子どもを望む両親が少ないばかりでなく、社会までもがそのようになつてきているのです。歴史には人間の社会は子どもを歓迎してきました。現代の社会は子どもに敵意を抱いているという点で特異なのです。現代に住む私達は人口爆発を心配して、あるいは子どもを養う能力がないから子ども

フリーセックス、避妊、中絶を唱えた後にミス・グレアは第三世界の様々な人々と生活を共にした結果、考えが変わったことを認めました。危険なピルやその他の避妊薬や避妊具をしきりに勧める受胎調節を声高に叫ぶ人によって女性や家庭にもたらされた荒廃を見て彼女の目は「開かれた」のでした。それらは世界の不幸な貧しい女性達に強要され、同

これらのことは一体何を意味しているのでしょうか。それは、もちろんこのかわいい赤ちゃんが幸運にも私達にとって都合の良いときに生まれてこなければ、赤ちゃんを私達が責任を持って育てるべき神様からの贈り物だと私達が一般的に見なして

泣くことはない。むしろあなたたちと、あなたたちの子らのために泣け。『うまずめ、子を生まなかつた胎、飲ませなかつた乳房は幸いだ』と言つ日が来る。」(ルカの福音書第23章28-29節)と言いました。その時、イエスは今世紀の後半のことを正確に予言して

いたのでしょうか。過去の世代にとって考えられないと思われることが今は、

キリスト教徒にさえ受け入れられるものになっています。

もし「予定外」という理由で存在することが許されないなら、私達のなかでどれほどの人が今日生きていられるでしょうか。あまり多くはないでしょうね。

マイケル・H・
スタイル

ある勇氣ある人の勝利の物語

つい先頃、私はある勇敢な若い女性によって書かれた新聞のコラムのコピーを受け取りました。サンデーという本名ではありませんが、その女性は、編集者の一人によって公表された手紙に答えて、地元の新聞に彼女の話を載せる機会を与えられたのです。彼女の話は勇氣ある一人の勝利の物語です。彼女が言おうとしている事に、私が何かを付け足して言うことは難しいので、彼女自身に説明してもらいましょう。

レイプされて身籠った子どもは神からの授かりものではないと信じていると書かれた記事に答えて、サンデーは次のように書いています。

私の美しい娘のジェシカのことを考えてみてく

ださい。彼女は八ヶ月で、歯はまだ生えていませんが、髪はふさふさして、リソゴジューズが好きになりかけたところです。彼女は言葉では尽くせないくらい私や祖父母や伯父や二人の姉たちから愛されています。

彼女もレイプされて身籠った子どもです。私は一九九二年にレイプされました。私は市民としての義務を果たし、レイプを報告しました。私は加害者を起訴するために警察や弁護士に協力しました。しかし、デートの相手にレイプされた事を立証するのが困難で、彼は無罪になりました。

その暴行がもとで妊娠しているのに気づいた時、私はとてもショックでした。私は長い間どうしたら

よいのか思案にくれませんでした。常識で考えれば、中絶がその答えだと言うでしょうね。でも、間違っています。私が子どもを身籠った原因がどんなに忌まわしい事であっても、「というのには、レイプは人の一生を変えるような下劣な、モラルに反した行為ですから」、一つの命が私の身体の中で育っていることに気づいたのです。私はこの子を、「私の子」として受け入れようとしたのです。私の友人や家族は100%私を支えてくれました。しかし、私に選択肢があり、私は正しい事をしたのだと思っています。

全ての子ども達は神からの授かり物です。どんなふうに彼らを身籠ったかなんて大した事ではないのです。

私はこの子の顔を見るたびに、私をレイプした犯人の顔を思い出すのじゃないかと不安でした。しかし、そんな事はありません。私の目には、予定外で、また愛ある行為の結果ではないけれども、とても愛されている、美しく、幸せな、ちっちゃな女の子が見えます。

完べきな世界では、全ての赤ん坊は生まれ、愛し合う夫婦の間に生まれるのでしょう。しかしながら、私達が住んでいるこの世界はそういう理想とはかけ離れています。暴力がはびこっています。人々は襲われ、殺され、盗まれ、レイプされています。

私はレイプを神から授かったものだとは思いませんが、私の娘は神から授かったものです。

中絶しないと決断するのは難しい事です。私がこの決断をしたのは、自分ですでに暴力による犠牲者であり、そして、私の子どもを第二の犠牲者にしたくないという思いによる

ものなのです。

レイプされての中絶はもつともだとお考えの皆さん、次の事を考えに入れてみてください。「神は本当に不可解な事をなさいます。私の娘のジェシカがその事を証明する生きた証人です。」

NRL news,4-24/95

プロ・チョイスか、悪い選択か？

大ざっぱに言って、中絶に対して次の3つの立場が考えられる。中絶反対・事情によっては認める。中絶するか否かの判断は個々のカップルに任せべきだ。大多数は3番目の自由選択「いわゆるプロ・チョイス派」を支持している。」

政府が国民に道徳理念を押しついたり、命じてはならない。個々の価値判断で自由に選択すべきだ。これがプロ・チョイス派の基本姿勢である。誰もが病院で簡単な手続きを踏んで、胎児を始末する権利を有する。すべて個人の価値観に従い、物事を自由に解釈して良いという。

私もかつてはプロ・チョイス派だった。実は、親戚を車で病院まで送り、待合室で中絶手術が済むのを待った事もある。これが、

当時洗礼を受けたばかりのカトリック信者の行いなんて、信じられるだろうか？もつともそれが自分の子だったら、決して墮胎などさせなかった。だが、あくまで彼女の子だ。彼女が決めたのだから、あえて考え直させようとも思わなかった。ただ静かに、彼女の決心を見守った。

私が口出しする権利など、どこにあるのか。もちろん、発言は自由だ。しかし中絶は法律でも認められていない。私ばかりでなく女性の多くが、この深刻で個人的な二者択一に悩むはずだ。ただでさえ難しい選択に、私が介入してさらに混乱させる必要があるだろうか？私には何の責任もないのだから、黙ってこの殺人を見届けよう。しかしながら、私達には

生きる権利がある。ひとり残らず全員に！この言葉を、飽きるほど聞かされてきた。プロ・チョイス派の人も、生命の始まりはいつか「を考えると、生存権の問題に直面するだろう。このテーマをとりあげた文書も数多く出ている。政府を変えるのは国民の権利である」と、私は特に強調したい。我々自身、そして子ども達のために、安全で幸せな政府をつくりあげていくのだ。

そう考えたら自分の中のジレンマは消滅した。現在私は確固たるプロ・ライフ支持者で、中絶もそれを認める法律も間違っている、と伝え広めるべきだと信じている。私達、すなわち社会全体が中絶を殺人に等しいと考えるようになったら、法律においても中絶を殺人と同じ罪と規

定すべきだ。プロ・ライフ運動が広く浸透するまで、実現は難しいだろうが。

私は、多数のプロ・チョイス派の人々も、本当は中絶に反対の気持ちを持っていると思う。ただ熱意が欠けているのではないだろうか。考えを明白にするよりは、何もせず黙っているほうが安全だから。

【わたしはあなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく熱くもない。むしろ、冷たいか熱いか、どちらかであってほしい。熱くも冷たくもなく、なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている。】(ヨハネの黙示録3：15-16)

どうか、もう一度、自分の胸に問いかけて、プロ・ライフの立場をはっきりと自分のものとしてほしい。

性と

尊い生命

「本文は性と尊い生命は神の賜物であると、ヨハネ・パウロ二世が若い世代に向けて語った内容をまとめたものである」

法王ヨハネ・パウロ二世の若者に対するメッセージは、次の言葉に集約される。社会に理性崩壊ムードが広がっている。イエス・キリストとカトリック教会が目指す、崇高で理性的社会の理想を掲げて危機を乗り越えよう。

「社会発展に従い、殺伐とした世の中になり、若者の心にも相当影響が出ている。夢もなくふらふらと、その場限りの楽しみばかりを求める若者が増えている。」

「彼らを救うには」法王

は語る。「社会が崇高な価値観を示すしか方法がない。若者が自由で知的に成長し、良識に従い、強い責任感をもち、周囲と協力して理性的な地域社会と国家をつくりあげていけるように。早急に対策を検討すべきだ。真理に基づいた確固たる情操観念のない教育は、若者を混乱させ、不安に陥れ、操作しやすい人間を育成してしまう」

「どんな国も、たとえ超大国でなくても、子ども達から善の本質を奪っては存続できない。あらゆる人間の尊厳や価値を重んじ、調和と責任感、周囲との相互理解、同情、結束、これらを家族や学校で、さらにマスメディアを通して伝えていかなければ」法王

は、人工的なバースコントロール、中絶、安楽死に対する教会のスタンスを批判する思想家の声に驚き立腹もしたが、話の中心は若者への警告、災いなるか

な、福音に耳を傾けぬ人々よ」となった。

教会は「信頼できる場所」で、信者は「共通の心と魂をもつ」べきとも表明している。

「カトリック教会関係各位、法王の要請に耳を傾けよ。(中略)寛容さと忍耐強さをもって、教会がキリストにとって最愛の妻と言うべき、常に精力的で活気ある場となるよう見守り続けよう。本来は神の物である教会を、「我が物」顔で独占すると、様々な問題が生じる。

「夫婦には両親たるべき責任があるというのが教会の考えだ。【対話、尊敬心、責任分担、自制】を通じて貞節概念を育ませるよう、さらなる努力が必要だ。特に若い人達には知性の価値、良心の調和、性が神からの素晴らしい賜物であるという内なる喜びを再認識してもらいたい」

「愛を基盤とする土台の

しつかりした社会を築くには、さまざまな反対勢力に負けず、生命の尊厳を貫く精神力を育む、大変な努力が必要だ。人権と正義を貫くため、教会は断固として胎児を含めてあらゆる人間の命を保護する立場をとっている」

法王はさらに続ける。

「時代を経ることに、生きる上での脅威は減るどころかその逆で(中略)子宮内の生命と終焉に近づいている生命を忌み嫌う、アンチライフ傾向が広まりつつある。化学や医学が発達し医療体制も進歩した今、目に見えない生への脅威が潜んでいる。中絶や安楽死というほかならぬ殺人行為が「権利」であり、

「問題」解決の手段として認められているのだ。罪なき者の大量虐殺が法律の下で科学的に行われるとは、何と罪深く破滅的な事か。現代の社会において、神の賜物である命と、その

他すべての権利の基礎となる基本的人権が、必要に応じて製造され、宣伝され、操作される商品のよう

に扱われる事が多い。「薬物やアルコール中毒、風俗産業と性の乱れ、暴力、これらは社会全体が立ち上がらねばならぬ深刻な問題である」

「その時楽しければ、便利ならばいい」「人それぞれに価値観は違っていていい」という風潮を非難している。

「若者よ！近頃の間違ったモラルに流されてはいけない。良心を見失わないように！」

声を大にしてそう語り、さらに法王は、特に家庭が危機にさらされている。命

厳そして友情に日々感謝しつつ、与えられた天命に向かって進んでいこう。

ポール・リクティス

の尊さが忘れさられている」とも。「こうした混乱の中、教会は若者が【生への回帰路】を切り開いてくれることを切望している。「道のりは長い。一人一人の力が必要だ。生命の尊厳のために、皆さんの知性、才能、意欲、情熱、勇気を貸してほしい」

「心配無用。戦いの過程には数々の障害や困難が待ち受けているだろうが、勝敗はもう決まっているのだから」

法王が若者に望んでいるのは、真の正義と愛に基づく文化を築くため、人々の心と社会構造を改め、神の福音を浸透させる「事だ。「生の文化とは、自然を敬い、神の創造物を護ることを意味する。生命に当てはめると、始まりである受胎の瞬間から天寿をまっとうし眠りにつく最期まで大事にすることを指す。神と神からの賜物、我々人間の存在価値と尊

「恋愛とデート」か「デートと恋愛」か

モリー・ケリー

よく「恋愛とデート」という言い方をしますが、言葉の順番が「デートと恋愛」の方が理にかなっているのではないのでしょうか？相手を知ってからでないと、恋愛は出来ないのだから。私達が神を知り、神を愛し、神に仕える様に神はなさったと、私は小学校で教わりました。この事からもわかるように、愛する前に知る事がくるのです！

デートする事によって、違う性を持つ二人の間は、考え方、価値観、夢、希望を共にしながら、お互いを知るチャンスを得ます。そして、もし科学が正しいのであれば、二人は恋に落ちるのです。しかしこの混沌とした社会では、恋という言葉は不完全でねじ曲げられ、本来の意味が

ら離れているので、ある人にとつては、説明がつかないゆえに恋を達成できないのです！「愛を育てる」とか「愛によって地球は回る」等の言葉は、まるで愛が科学的に製造された製品の様に聞こえます！「目惚れの愛」はどうでしょう？これでは質と恋ののぼせが同じ意味になってしましますが、二つは違うのです！恋ののぼせは単に感情の問題で、はかなくもあれば何の要求もありません。愛は知識の上に成り立ち、尊敬の念を伴うのです。

次に、「愛はソファアの様にかわいい」と言われていますが、時には木のベンチの様に堅い事もあります！何故なら、愛には規律が含まれていて、規律とは居心地の悪い事もあるか

らなのです！そしてもうひとつ、もし私がソファアを買いに行くなら、いくつも座ってみて、気持ちの良い物を探します。けれども愛は、気持ちが悪くても買う事は出来ないし、試してみたり、自分一人の喜びの為にあるものではありません。デートは幸せで楽しい経験かもしれませんが、罪を犯す事もありうるのです。すべては尊敬の念にかかっている、尊敬の念は愛の大部分を占めているのです！愛とは穏やかでやさしく、決して乱暴ではない、と偉大な聖書の一節でも言っています。それはデートする時の良いガイドラインにもなるでしょう。

あなたのデートが幸せで健康的で、そして神聖な人生体験になる手助けに、

いくつかのガイドラインをここに挙げておきましょう。

・境界線を引きなさい。抱き合ったり、愛撫したり長いキスは、立ち入り禁止。

・相手を誘惑したり、からかったり刺激するのは止めなさい。それはずいし、賢い行動ではありません。

・イエス(行動を起こすには)には二人必要だけれど、ノーと言うのは一人で十分なのだとう事を覚えておきなさい。

・複雑なメッセージは避けなさい。口でノーと言っている、しぐさや服装がイエスと言っていない様に！

・デートする時、いつも神がそばに居ると思いなさい。そうすれば、百分清らかで安全なデートが出来るでしょう！

キリスト教徒である親の責任

福音書の価値が深められ、それが具現される家庭を造り、育てていくのは、

キリスト教徒の親である皆さん、あなた方の責任です。何と多くの死や愛情不足の兆しが、私たちの社会を特徴づけていることでしょうか。そして、夫婦の貞潔や命の神秘性を攻撃するものが何と多いことでしょうか。キリスト教徒である夫婦の皆さん、安易に離婚に頼って、道を誤ってはいけません。命の炎が消されるのを黙って見ていてはいけません。夫婦間の真実の愛は、命に対する前向きな態度で表される必要があります。避妊することとは、夫婦間の愛を否定することであり、神の創造的な活動に自分も参加できるという贈り物を、単なる

心得違いのエゴイズムに変えてしまうことになるのです。

キリスト教徒の夫婦の皆さん、あなた方は洗礼や堅信と、結婚という秘跡の力を通して、信仰を伝え、社会を変化させる影響力とならなければなりません。家庭で父母の皆さん、あなた方は子ども達に最初に愛を伝え、教える人になければなりません。家庭で愛し祈ることを習わなければ、後になってその不足を補うのは難しいのです。

「ヨハネ・パウロ二世

1992年10月12日」

5月

Pro Life Hero

東京の四ツ谷駅のすぐ側にイエズス会のイグナチオ神父様があります。カンガス神父様はその主任神父様です。昨年十一月、私達の事務所「赤ちゃん：最初の十ヶ月の旅」の本を一万冊も注文して下さいました。

その「赤ちゃん：最初の十ヶ月の旅」の本をどのように御利用して下さいたいのでしょうか？とお尋ねすると、教会の入り口に置いて、誰でも自由に持ち帰る事が出来るようにして下さいたいとの事です。信者に限らず、大勢の人々が訪れる教会なので生命の神秘を知らせるために、このように配慮して下さいました。

また、結婚式も多いので

すが、結婚式そのものより、準備に力を注いで、五ヶ月間毎週カップルは勉強するそうです。その時、この本は指紋がいつ出来るか等詳しく載っている、若者達は生命の神秘を納得しているとおっしゃられました。

日本は法律上養子をもらいにくいけれど、法律家は養子をもらい易い制度に改正するとか、マスメディアの人々は生命の神秘をもっと皆に知らせて、医者は赤ちゃんを殺さないで、もっと勉強し続け、聖職者は宗派を越えて、高いレベルで団結し広げていけるように、それぞれの人々へのお言葉と共に最後にはプロ・ライフ運動のために祈っていますと何よりも力強いお言葉を頂けました。

大岡 滋子

尊厳ある死

尊厳ある死。私自身、それを求めています。誰が尊厳なき死など求めるでしょう？

私達は神の姿そっくりに創造された人間です。ですから、私達は受胎の瞬間から創造主より尊厳を与えられています。そして人生を通じて私達を守り、支え、生きる道を示すことで、神は尊厳を与え続けて下さいます。その人生の終わりに、尊厳なき死を迎えることは、大変大きな打撃です。

そもそも尊厳とは何でしょう？辞書によれば、尊厳とは値打ち、つまり価値があることを意味します。私達は皆、人生が意味あるものであるように望んでいます。だからこそ、死も価値あるものであってほしいと願うのです。しか

し、長い苦しみの後に訪れる死は、値打ちのないものでしょうか。愛する人達に経済的・精神的負担を与える死は、価値のないものなのでしょうか。

私達は、自分の死ぬ時、場所、そして死に方を選べなければ、尊厳なき死であると教えられています。苦痛に耐えなければならなかったり、精神的あるいは経済的負担を負うのなら、それは尊厳なき死であると。

私が十歳の時、祖母は重い脳卒中を患いました。病気になる前の美しくてはつらつとした祖母は、ぼんやりとしか覚えていません。むしろ病気になる前の祖母を鮮明に記憶しています。なぜなら祖母は話すことも、読むことも、歩くこともできずに死を迎えるまでの二十年間を過ごしたからです。亡くなった時、祖母にはほとんど視力がありませんでした。片

足は切断され、もう一本の足もまもなく失おうとしていました。祖母は常に苦痛に苦しんでいました。

このような祖母は、安楽死を望むには申し分のないケースだったでしょう。ここにあるのはいわゆる価値なき人生、生きる意味のない人生です。祖母は多くの病人で、絶え間無い苦痛に苦しんでおり、人々と意思疎通できないばかりか、大きな経済的負担を引き起こしているのですから。こんな人生にどんな価値が、値打ちが、尊厳が見出せるというのでしょうか。

夏の午後にはよく自転車で療養所に行き、祖母を見舞いました。思春期前の子どもにはやや退屈ではありましたが、私はいつも自分から進んで行きましました。私達は、庭の木陰に座って静かに時を過ごしました、その時は、祖母が私に何かを教えてくれて

いるとか、教えることができるなどとは、思ってもいませんでした。祖母が言えるのは、「いいえ」「指示」「もちろん」の三つだけだったからです。彼女の声の抑揚と身振りから、言っていることを理解しようと思命に努力しました。それが成功する時もあれば、失敗に終わる時もありました。

普通の祖母と孫娘が一緒になつて楽しむ事柄は、私達には当てはまりませんでした。祖母は料理も裁縫も教えることができませんでした。家事や育児についてのアドバイスも与えることができませんでした。けれども今思うと、たったひとつ祖母が教えてくれたことがあります。他の誰からも学べなかつたこと、それは、いかに苦痛に耐えるか、ということでした。

祖母の脳卒中から何年も後、私が十九歳で、人生がまさにこれから開けようとしていた時、私は進行

性の衰弱症と診断されました。私の目標、夢、人生の楽しみは、突如として痛くて変形した鉄のような足に踏みにじられたのです。指も動かせない私に、裁縫の練習など何の役に立つでしょう？生涯自立して生活することなどない私に、家事など何の意味があるでしょう？

失意の中で、自分が失ってしまったものへの嘆きと今体験している苦痛への嘆きを理解してくれる二人の人を私は見出していました。一人は悲しみと嘆きを知っている人キリスト、そしてもう一人は祖母でした。

私は自分の嘆きを十字架の元に打ち明けました。そして重荷を負った心の安らぎを得ることができました。身体の癒しは得られませんでした。もったいない癒し、罪の許しを得ることに魂の癒しを受けたのです。こうして私

の人生は、釘付けの苦しみ
を味わったキリストに託
されたのでした。なぜかは
わからないけれど、キリス
トを信頼することができ
たのです。

同時に、私は祖母が示し
てくれた静かな共感にも
安らぎを感じていました。
私の膨れた手を自分の手
で優しく包んでは、目に涙
を浮かべて私を見ました。
話せなくても、祖母が理解
してくれていることが私
にはわかりました。私を愛
してくれていることも。祖
母は、自分が神様から与え
られた慰めで私を慰めて
くれました。彼女の辛抱強
い忍耐、神様への子どもの
ように無邪気な信頼、来世
への希望は、私に慰めと希
望を与えてくれました。

担が起こると考えるのが
妥当でしょう。身体障害者
の妻、母として、夫や子ど
もに「重荷を背負わせる」
でしょうか。自分の医療費
を捻出するために家族に
経済的負担を強い、そのた
めに夫や子どもが人生を
犠牲にするのを望むで
しょうか。

もちろんそんなことは
ありません。誰ひとりとし
てそれを選択する者はい
ないでしょう。考えただけ
で尻込みしてしまいます。
しかしそれも、主が「わた
しの意のままにはなく、
あなたのみ旨のままに」
【ルカによる福音書22章42
節】とおっしゃったよう
に、私達もそう言うべき人
生の側面なのではないで
しょうか。

私達は最終的には死に
おいて、生と同様はつきり
とした選択を迫られます。
私達の生と死の細部にわ
たるまで神が管理してお
られるか、または管理して

おられないか。

これには中間はありま
せん。神に与えられた尊厳
を持つか、それとも自己決
定により自らの手で尊厳
を勝ち取るうとするのか。

苦痛と長期間の苦しみ
への恐怖はあります。死が
引き延ばされるのを目に
すると、「私なら耐えられ
ないだろう」とつい言っ
てしまいがちになります。け
れども、神の答えはこうで
す。「神は忠実であるから
力以上の試みには会わせ
たまわない。あなたたちが
試みに耐えそれに打ち克
つ方法をも、ともに備えた
もうであるう。【コリント
人への第一の手紙10章13
節】ですから、正しい問い
は「(苦痛に)耐えられる
のか?」ではなく、「神様
のために耐えますか?」な
のです。

祖母がその苦しみを通
して、後に私が心底必要と
した神への信頼と神の意
思の受け入れを教えてい

たことを祖母はつゆほど
も知らなかったに違いあ
りません。私と同じよう
に、あなたにとっても祖母
を証人として下さい。祖母
は外見上は衰えていく一
方でしたが、内面的には日
に日に蘇生していたので
す。

そのような祖母の死こ
そ、真に尊厳ある死だった
と思います。

ジェーン・コリジョン

悪魔 対 キリスト

人が犯すあらゆる罪、こ
の場合には中絶ですが、その
前後において、いかにキリ
ストと悪魔が異なつて現
れるかは、重要な事です。
中絶前には、キリストは腕
を広げて道をふさぎ、こう
言います。「中絶をしては
いけない。今あなたが払う
犠牲は、後に百倍になつて
報われるであろう。私はあ
なたに生命を考えた。それ
はあなたが人生を豊かに
生きるためである。私に希
望を託しなさい。そうすれ
ば、私はあなたを裏切らな
いであろう。」

一方、悪魔はこう主張し
ます。「この邪魔物を追い
出してしまえ。おまえが失
うものを考えてごらん…
選択の余地はない。もつこ
の問題には充分巻き込ま

れているんだ。今度はここから抜け出さなければ。中絶さえすれば、おまえは自分の人生を再びコントロールできるんだ。すべて前の通りに戻ることができろぞ。」

キリストは我々が未だすべてを知りえない未来を信じることを求め、悪魔は我々が現在既に持っているものを守るための行動するよう駆り立てます。キリストは希望に根ざした倫理的な決断を求め、悪魔は現在必要なもの、欲望、恐怖に基づいた「合理的」な決断を求めているので

す。しかし、中絶の後はどうでしょう？キリストはその後希望を与え続けません。「私のもとに来なさい。あなたの涙を私も分かち合いたい。そしてあなたを慰めたい。すべては許されていることを知りなさい。ご覧なさい、あなたの子は私の腕の中にいて、あなた

の生涯が終わって私達のところに来るのを待っている。」

一方、悪魔は引き続き絶望をかきたてようとします。中絶前には理解者のようなふりをしていたのに、中絶後は激しく非難を浴びせるのです。「自分のしたことを見てごらん！おまえは自分の子を殺したんだ！それより悪いことがこの世にあるかい？もう何の希望もないし、何者でもない。おまえの罪は深すぎて救済されないのだ。情事や酒や、あるいは自殺の静寂の中にせいぜい慰めを見出すがいい。そして再び妊娠したら、一度は中絶した身なのだから、もう一度するかも知れない。そうすれば、この苦痛により強くなり、免疫ができるかも知れないよ。ここまで来れば一度も二度も大した違いはないさ。おまえは自分が人殺しであることを証明したんだ。最悪だよ。

そして、自分をこんな風にした人々をどんなにか憎んでいるだろう。男友達、両親、医者。もう誰も信用できないし、おまえを愛せる人もいやしない。おまえは殺人者なのだから。おまえはたつた触りさ。一番いいのは自分の過去を葬り去ることだ。他人からも自分からも隠すんだ。だが、自分で重荷を背負っていない。自分から忘れるな。」

中絶の前には、キリストが罪をとがめ、悪魔が弁解をするのに対し、中絶後は悪魔が非難し、キリストが罪を許そうとします。

これはつまり悪魔の取引なのです。悪魔は、女性が既に持っているものを失うのを避けるために中絶するのを勧めます。しかし、いったん中絶を選んでしまうと、悪魔は女性を絶望の底に閉じ込めてしまい、何もかも失わせてしまつのです。実に、悪魔は

あらん限りの絶望を彼女の人生に送り込みます。それは中絶した本人にとどまらず、子ども、父親、祖母、兄弟と、中絶という毒で触れられるおよそ全ての人々にまで及ぶのです。悪魔の目的は三つ、不幸を生み出し、より多くの罪を作り出し、神の慈悲への疑いを生じさせる事です。

